

この星のどこかで あなたを待ってる

生きにくい子ども・若者を支援するために

Vol.2



ふじのくにニッポンの縁側フォーラム
独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業





「おまえら、絶対おれから逃げるな。どこでも俺が段取りしてやる。
それでもあかんときは死ね。そこまで俺はつきあったから逃げるな」
「社長、しんどいです。そんな愛情うけたら死にそうです」
20歳になっていきなり愛情もらっても体がびっくりしてしまうんです。
小さなころから安心も安全もない状態で育ってきたからね。

Kentaro Kusakari



うそにとことん付き合ったらと思ひまして。うそに付き合っているのだけど、
うそ言っていると私もわけ分からなくなってくる。

「うそついていること分からなくなってきた」

「社長、私も分かりません」

「おまえ、初めてほんまのこと言うたな」

3年かかってほんまもんになっている。逃がさなくてよかった。

Kentaro Kusakari

カンサイ建装工業株式会社の社長である草刈健太郎さんは、罪を犯して刑務所に入っている若者たちを出所後に雇用する「職親プロジェクト」に携わっている。

2005年、アメリカに留学中の妹を殺された。写真見たら20カ所くらい刺された写真。家族が一回崩壊しますね。誰かの責任にしたいという気持ち。その後、恨みに変わります。心が病みます。どうやったら犯人を殺せるのだろう。暴力団事務所に行って「なんとか殺してくれないか」と何度も相談に行ったら、警察が来ました。

東日本大震災の被災者支援に関してから1年過ぎたときに、刑務所で就労支援しているのだけど手伝ってくれへんかと言われた。妹が殺されているし、悪いやつは一生なおらない、全員死んだらいいと思っていた。

初めて刑務所に行ったときに、妹殺したやつもこんな良いところに入っているのかと腹立たしかった。加害者の支援なんて本当に嫌だった。でも、被害者をなくすためには、加害者を少なくするしかないと思うようになりました。

少年院や刑務所ではコミュニケーションできない。相手としゃべらないと育たない。人を愛することができるようになり、自分を信頼できるようになるんです。

子どもたち、みんな夢はもっている。だけど組み立て方がわからない。弊社は10人雇いました。でも6人やめました。うち来るのは仕事したいからではない。早く刑務所を出たいので来る。

うちの会社やめてもいい。やめてもいいんです。「いつでも帰ってこいよ」と言ってやる。気合いと根性でやっていたらみんな逃げていく。だから逃がさないこと。「おまえら、逃げてもいいよ。でも、何かやりたいことあるのだったら、俺に回してくれ」。3000人くらいの友だちとつながっている。なんでも仕事がある。

「社長、戻ってきていいですか」

「あほか、お前、今戻ってきたらすぐやめる。石の上にも3年じゃなくて、3カ月や」

でも、ちょっと意識を変えると会社の戦力になる。石からダイヤモンドに変わる。



「先生たちはボクの人生を変えられますか。
そのために税金もらっているんでしょ」

「ばか言うな。君の人生を変えられるわけない」

馬が水を飲む気になるかどうか、
それは馬しかできない。

Tsuji Kazuo



辻和雄さんは1987年に法務教官として小田原少年院で仕事を始めてから30年間、少年院や医療少年院、少年刑務所で子どもたちの矯正や教育に関ってきた。

ひと昔前の少年院や刑務所は出したら終わりだった。でも、社会に出すわけだから、そこで働いている人はどんな人なのか知らないといけない。鑑別所や少年院や刑務所がそれぞれを知らない。なんとか架け橋になるといいなと思っている。

大正時代の建物のような古い少年院では廊下で面接したり、廊下でご飯食べたりしたこともある。非行性の高い子たちがたくさん入ってきたという。

自立するためには自分で考えて行動していかなければならない。少年院では規則が一番だから、自分で考えて行動しない。これでいいのかなと思った。社会に出ることについて自己決定をしないといけない。ところが、なかなかできない。

ウォシュレットを怖くて押せない子がいる。自分で何かを考えてやるということができない。

少年たちに強引に反省を求めても意味がないのじゃないか。作文や課題帳で反省をたくさん求めてきたが、社会に出してどうするということが抜け落ちていた。

愛着形成ができなくて育ち方で発達障害に似た症状がでてくる。お母さんの姿を見ると震える。お母さんはもっとも信頼できる人なのに、震えて逃げ回る、ひきこもって固まる。学校でもいじめられる、お母さんやたまに来る男に殴られる。

傘で友だちを刺してからいじめはなくなった。それによって初めての承認欲求が満たされ、その子は非行が進んでいった。お母さんを殴るようになる。そんな子に反省を求めてもしょうがない。





五島裕子さんは有限会社「ウィルビィ」専務取締役でNPO法人・愛媛県相談支援協会の理事長でもある。2012年に愛媛県松山市で高齢者介護と保育所をひとつの建物内で開所した。

洒落た一戸建てで、看板はない。「喫茶店ですか」という人がいる。毎日通ってくる人があきないように、ソフト面だけでなくハード面も大事です。お年寄りをお迎えに行く車はトヨタの「セラ」。スポーツカーのようにドアがガルウィングで上方にあがる。ただ乗りやすい車だと、お年よりは弱っ

ていく。スポーツカーに乗りたいかどうか、乗せたいかどうかということです。

「目配り」「気配り」「ピラ配り」がモットーです。相談支援専門員の支援はサービス等利用計画をつくるのではなく、権利擁護だと思っています。

2016年に認可保育園になり、ケアマネジャーが保育士の資格を取りました。実技が困ったが、ギターでも大丈夫なんですね。50代の男性が新米の保育士になり、0～3歳児の保育を担当します。

「わからんのよ」

認知症のおじいちゃんが壁をたたく。

壁に穴があきます。

「だいじょうぶよ。

私たちがぜんぶ覚えていくから」。

若い保育士が声を掛ける。

忘れたって、だいじょうぶ。

みんなでおじいちゃんのこと、

おぼえていくから。

あかちゃんが寄ってきて、

おじいちゃんに抱きつく。

眉間にしわを寄せていたおじいちゃんが、

うれしそうに笑うんです。

Yuko Goshima

うちの長女は保育園で愛情をたっぷり受けて育ちました。私が児童養護施設で働いていたときに子育てできなかったのです。自分が権限をもって仕事するようになったら子育てできる職場を作ろうと思った。なめまわすように、だっこし続ける。子どもの方から自立していきますね。「もういいから」というように。

4月の入園式で祝辞を述べたのは脳腫瘍の少年です。5月には動物園へ職員もヘルパーさんもみんな一緒に行きます。7月にプール開き。パパも

おばあちゃんも来ます。年齢差90以上の運動会もやります。忘年会は道後温泉です。

3歳のときにたばこの火を背中に押しつけられた女の子がいて、栄養失調になって児童養護施設に保護されました。高校生のころに私が働いていた療護施設に泊まって福祉の仕事をしました。いまは37歳になりました。子どもが顎症で耳の形成手術を何度もした。そんな子も働いています。



自分への肯定感が低い子は、何ごとにも自信が持てないのです。
幼稚園で誰かが暴れると、同じように暴れ出す。
自信がないから誰かのまねをする。
まねをすれば受け入れられるのじゃないかと思っている。
大人を信じていないから、さまざまな生活習慣の獲得ができないのです。

Yasuhiro Fujii

2016年、厚生労働省を退官した元障害保健福祉部長の藤井康弘さん。児童福祉、障害福祉、年金などの制度設計に携わりながら、私生活ではたくさんの里子を育ててきた。今も現役の里親である。

愛着関係は相互作用なので特定の大人が赤ちゃんに対して、保護してあげたいという思いが強い信頼関係を生みます。子どもは特定の大人との愛着関係の下で養育され、安心感の中で自己肯定感を育み、基本的信頼感を獲得できる。

初めは親が見えないと心配で不安でしかたがない。それが、親が見えなくても不安がなくなってきて、離れていく。でも、怖いと思ったら帰ってくる。安心して、もうすこし先に行ってみよう、冒険してみようと思うようになり、だんだん離れていく。

アタッチメント(愛着)の対象がないと、そもそも大人が信じられない、人間が信じられなくなる。

自己肯定感が低く、守られているという経験がないと、「赤ちゃん返り」や「試し行動」をします。里親からすると、とんでもないことをやってくれる。どこまでこの大人は許容範囲なんだろうと試しているかのようです。何ごとにも慎重な子。誰でも彼でも愛嬌を振りまく子。目を合わせて会話できない。そんな子たちがいる。

乳児院のような施設で職員たちは一生懸命に支援をしても、子どもにとってはやはり刺激が単調になる。先週、葬儀があって里子を連れて行ったのですが、小さい子なりに親戚に相手してもらっている。近所のおじさんおばさんも相手をしてくれる。乳児院だとそういうことにはならない。コミュニケーションや刺激の量や多様性は家庭と施設はかなり違います。

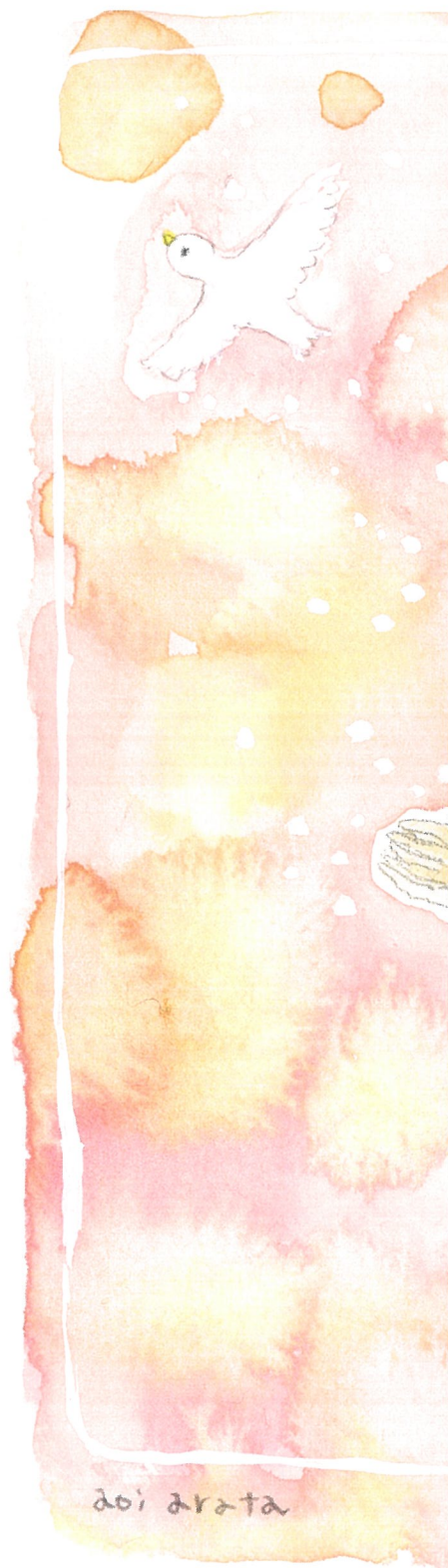


「みんなで鍋をつつくて
本当にあるんだね」

こども食堂で高校生らしい
女の子がそう言ったというのです。
家族で鍋をつついたことが
なかったということですね。

自分にとっての当たり前が、
その子にとっては当たり前じゃない。
人を支援するというのは
自分の当たり前を問うこと。
自分の当たり前が
揺らぐ経験でもあるんですね。

Makoto Yuasa



doi arata

「反貧困」、年越し派遣村村長などで知られる社会活動家の湯浅誠さん。こども食堂にも関り、活発な情報発信をしている法政大学教授でもある。

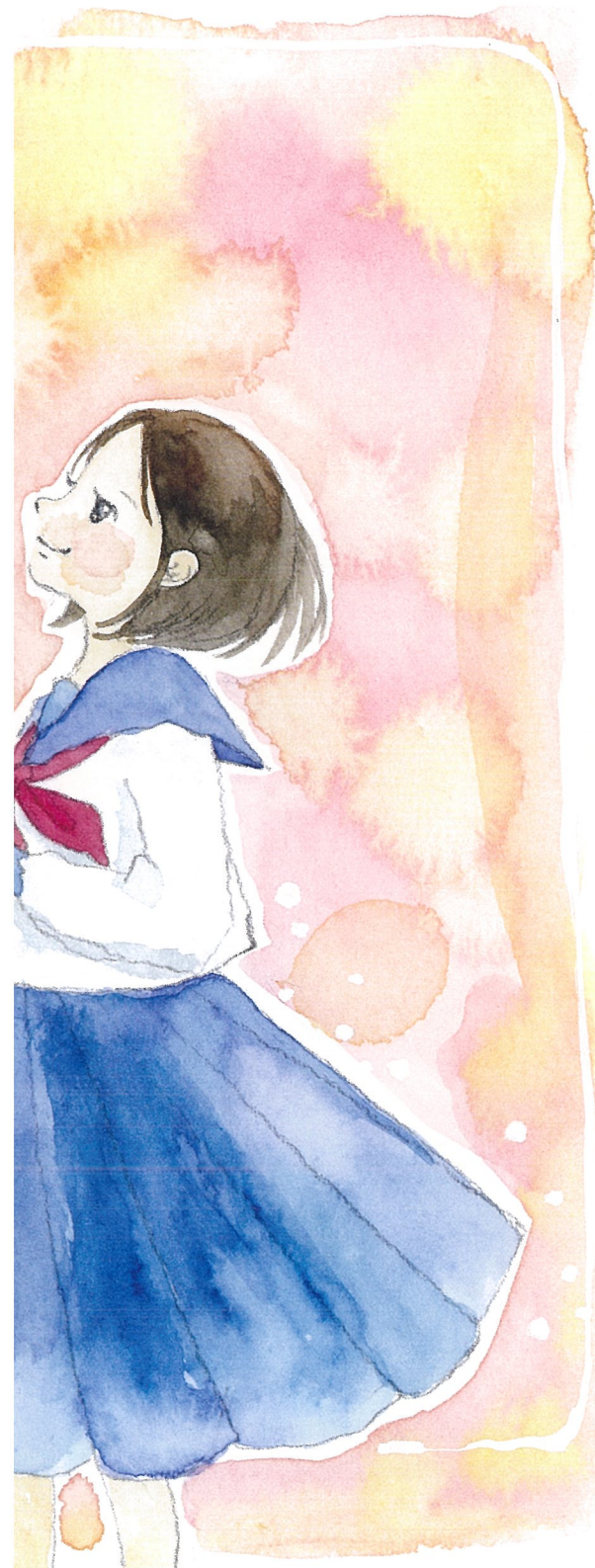
親は子どもにいろんな体験をさせようとするわけです。海に連れてきたい、山へも連れてきたい、川にも連れてきたい、サッカーをやらせてみたい、野球もやらせてみたい、ピアノも習わせてみたい、いろんな体験をさせる中で、おもしろいことが出てくればそれを伸びて行けばいいな、という風にして関わっていく。

ところが、そうではない子どもがいる。こども食堂でも学習支援でもそうなのですが、食事や学習だけではなく、そこに集まった人が新たな人間関係作ったり、新たな価値観を身につけたり、新たな体験を持つことです。

多くの人にとってできるのが当たり前だろうということができない人がいます。ずいぶん怒られるんですよ。「なんでお前こんなこともできないんだ」ってね。「あんたがこの世の中で生きていくためには、はきはきと面接が受けられないといけないし、履歴書も上手に書けないといけないし、できないとあんた暮らせないんだよ」

怒られ続けて、自分はだめなんだな、直さなきゃいけないんだな……と思ってしまう。あるルールの中に入って同化していくという認められ方です。

そうしたものは違うことを私たちの活動は求めている。それはいろんな人がいるから、社会が優しく包み込んで下さいね。世の中に対して、もう少しあんたたち自身が変わらなきゃいけないんじゃないの？ 人を支援するっていうのは自分の当たり前を疑うってことだよ。なんであなたは自分の当たり前を疑えないの？ というようなことを相手に伝わるような形で言っていく。そうやって世の中を変えていくのが、たぶんソーシャルアクションなのだろうと思います。



札幌にある社会福祉法人「麦の子会」の総合施設長、北川聡子さん。生活困窮、児童虐待、発達障害など複合的な問題を抱える子どもと親を支援している。自らも障害のある子をたくさん里子にして育てている。

怒りは悪いことばかりではありません。何か社会の中で課題があったり、差別があったり、不公平なことがあったら、やっぱり政治活動を起こしたり、よりよい社会にするといったエネルギーになったりします。

アンガーマネジメントは、怒らなくなるということではなく、怒る必要のあることは怒れて、怒る必要のないことは怒らないようにして、後悔しないことを目的としています。

ほかの人を傷つけないように、自分も傷つかないように、モノを壊さないようにする。上手に怒っていることを表現できるようにすることです。

怒りは二次感情です。悲しさ、不安、辛さ、傷ついた気持ち、恐れ、侵入された気持ち、認められなかった、愛されなかった……。期待が裏切られた時、罪の意識に駆られる気持ち、人に拒否された時、辛いんですよね。そういう一次感情があふれて怒りになってしまいます。怒りの下にある一次感情を理解することで、相手を理解したり、自分の感情を爆発させることが少なくなるかもしれません。

怒りは高いところから低いところへ流れます。そして、身近な人ほど怒りが強くなる。親から子へ、夫から妻へ、上司から部下へ。

約束は守るべき、家はきれいにしておくべき。知らず知らずのうちに誰もが身に付けている信念や価値観を相手に求める。それが裏切られたときに怒りが出るのです。怒りの正体は私たち自身が持っている「～すべき」という理想なんです。





「怒りはね、相手のせいじゃなくて、自分の中にあるんだよ」
自分の理想が裏切られたとき、怒りが出てきます。
怒りが出たら、深呼吸。
ゆっくりと息をすって気持ちを落ち着かせます。

Satoko Kitagawa

女性がひとりでも生きていける。


スタンダードな家族の形じゃなくてもいい。
生きにくい人を受け入れるふところの深さ、
精神的土壌があるんでしょうね。

あたたかくて、寛容で、
居心地がよくて、温泉もあります。

そこにときどき甘えてしまうんですけどね。

Sakae Saito





熱海市長の斎藤栄さん。国土庁技官、国会議員秘書などを
経て、2006年に初当選した。1期目は財政再建、2期目は観
光振興に辣腕を振るい、3期目の現在は福祉や教育を充実さ
せ「住まう町」として魅力のある町づくりに尽力している。


熱海市は高齢者のうち3人に1人が独居の女性です。高度
成長期に全国から労働力として、仲居さんとして女性がたく
さん熱海にやってきた。その方たちの多くが、いろいろとワ
ケありで、ひとりで熱海に来て、またそこから新しい家庭を
持った方ももちろんたくさんいらっしゃいますけども、その
ころ30歳だとしてそこから50年経って、今80歳代くらい
の方です。かなり高齢になって、率直に言うとそんなに所得が
高いわけではない、正直生活保護の方もたくさんいらっしゃ
います。熱海は県内の生活保護率の3倍です。1.7%くらいで
す。静岡はたいへん豊かな県なので、全国的には低いんです
が、高齢化率だけではなくて、所得も低い。数字から見れば
貧困です。また、ワケありの方が多い。それは逆に熱海の強
みでもあると思っていて、女性がひとりでも生きていける街
だと思っています。たとえば、スナックを開いてママさんにな
る、人生苦勞されていますからいろんな悩みを聞くことが
できる。また、東京のホームレスの方たちが最後に居つくの
が熱海と言われています。東海道線、東京から電車に乗って
最終地が熱海なんです。

全国1800の自治体のうち多くの自治体が2050年までに消
滅してしまうというところがどれくらい減っていくかという一
覧をだしていますが、静岡23市中、消滅可能性都市県内
での若手の人口減少がもっとも懸念されているのが熱海。それ
くらい厳しい状況です。これからやりたいのは「住まう」まち
熱海を作ることです。いくらお客さんがきて、経済が
潤っても、そこに住む人がいなければ何のために街づくりを
しているのか。街が潤って、住む人が幸せになれる街にし
ていきたいと思っています。お客さんが来て、生業が成り立っ
て、まちが潤って、いただいた税金を有効に使わせていただ
いて、教育、福祉、人口問題に力を入れていきたい。



ロックンロールはこんな私をずっと見捨てなかった。
「あいつはどうしようもない」と言われていたときも、
見捨てないで寄り添ってくれたんです。
「そんなお前を愛してるよ」と。どんなときでも。

Tetsu Kashiwa



かしわ哲さんは6年前に神奈川県厚木市でNPO法人ハイテンションという障害者を支援する事業所を立ち上げた。NHK「おかあさんといっしょ」の5代目うたのお兄さん。「すずめがサンバ」「きみのなまえ」などがおなじみ。

生活介護「Jump」、放課後等デイサービス「スローバラード」、ヘルパー業務が「Love jets」、これを聞いてあーって思う方は相当な清志郎ファンですね、全部忌野清志郎さんの楽曲から取りました。

Jumpというところで、ほかの事業所がパンやクッキーを焼くように僕たちはロックンロールをやっている。それで全国ツアーしてお金をもらって、ロックンロールバンドで生きている。ドラムは梶くん、元ブルーハーツの梶原徹也くんでして、楽しくやっています。

やっぱり生活介護でロックンロールやるって前例がなかったですからね、神奈川県も、最初変な人がきたなーって本当に事業所やるのかなーってね、大変だったんですけども。専門性があるから福祉やるっていうんではなくて、何か特化している人が入ってきて楽しいものをつくっていく、制度ができて形ができたときに次はどうしていくかって、どういう豊かなものを、どういう楽しいものを作っていけるか、みんなで考えていく。

実は楽しいもの、楽しいことをみんなで考えて続けていくってとっても大変なんです。深刻な顔して真面目な顔して考えていく方がよほど楽なだけで、毎日明るく楽しくにこにこして笑って生きていこうって一番豊かな社会なんだけどそれを突き詰めていくって実は大変なんです。芸能とか娯楽とか芸術とかがって低く見られがちなんだけど、それをやっていくことがみなさんの生活をどれだけ豊かにするか、そこを振り返ることが大切で、私たちの場合は、たまたまロック音楽が何よりも大好きだし尊敬しているし、それをみんなでやっという、プロフェッショナルな人たちが新規で入ってきて、うちは子どもたちが来るとずっと音楽やっていて「OH! イエーイ!」とか「オッケーベイビー!」とかいってやっていますが。

今やってることは2020年に向けて、ロックバンドやダンスパフォーマンスとかがいろんなところで活発で行われていて、全国ツアーの先々でネットワークを作って、いわゆる「感動ポルノ」みたいなつくりこまれた障害のある人たちの笑顔とか世界観ではなくて、もっと豊かな文化や芸術・芸能としてアール・ブリュットとかもありますけど、そういったものをじっくり作り上げていこうと思っています。




「ままぶくろ」はママのニーズを入れる袋、子どもの月齢やママによってニーズは違うので、その都度ママのニーズを聴いてどう応えられるか積み重ねている。高齢者が通うデイサービスのママバージョン、2011年に静岡市で立ち上がった。

私たちは子育てしている主婦なので、まずは仲間作りと場所探しからということで、ママの部活動といって、特に資格はなくても、趣味を極めたお母さんが「部長」や「講師」になって部活動形式で

楽しいを入りに月1回単発での活動を始めました。

私自身は転勤族で10年前に夫の転勤で静岡に越してきました。生まれは北海道で、埼玉県で1人、兵庫で1人、長野で1人産んで、10年前に静岡に転勤になって静岡で1人産みました。自分自身も子育てをされていて、生後2か月にならない子を連れて兵庫県に引っ越したときに、ひとりぼっちというか、実家も遠いし、頼る人がいない中で



ずっとおうちにて、話し相手がいない。
赤ちゃん以外、誰ともしゃべらない
お母さんが多いんです。

お仕事をしていない、
子育て中心のお母さんは、逃げ場がない。

お金を払って自分のケアをすることに
すごく罪悪感を持っている。
子どもを預けてまでして
自分の時間を作るというのが、
この子にとって本当にいいことなのか
悩んでいることが多いです

Mama bukuro

助けてもらったのは、そばにいた友達で同じ子育てしているお母さんで、ちょっと先を行くお母さんに助けてもらった日々でした。

寝不足でふらふらでだっこしながら外に遊びに行くんですけど、高齢者の方は家の前にお迎えのバスが来てデイサービスに行くんですね。デイサービスに行って、お昼ごはんを食べて、お風呂に入って、体操したり、おしゃべりしたりして帰ってくるんですけど、私たちがそんな時間があって

もいいんじゃないか、月1回でも休息できる時間があったら、「子育てがんばるぞ」という気持ちが湧いてくるし、それは子育てする気持ち、養う力を作ることができる大事な時間になるんじゃないかって思います。最近、子育て支援って言われるんですが、子育て支援と同時にやっぱり子どもを育てているお母さんを支援することが大事じゃないかなって思います。

性風俗の世界で生きている
ママたちと、
一般家庭で幸せに生きている
ママたち、
そう差はないですよ。

Masayoshi Kawaguchi



児童養護施設の職員だった川口正義さん。児童養護施設で子どもを待っていたら遅いと32歳で相談室を立ち上げて28年目。スクールソーシャルワーカーをやったり、一般社団法人を立ち上げて子どもの貧困の支援をやったりしてきた。独立型社会福祉士。

出会ってきた子どもたちは、自分で自分を追い詰めたり、人を殺して塀の中に入ったり、子どもを殺してしまった母たちもいます。

中学卒業した後15歳以降のサービスってないと思いませんか。最近、警察の事情聴取受けました。生後まもない子の死亡事件があって、支援していた子だったから、供述調書取られた。公的機関が受け入れなかった自殺未遂した10代の女の子を保護して、その子を支援している最中にその親友が自殺をしたりとか。

性風俗の世界で生きざるを得ない少女・女性たちの支援なんておそらく国はやらないですよ。最もしんどい状況の中で生きている女性たち、母や少女たちをどういう風に、お節介をせず、一緒に生きる時間を紡いでいけるか、支援とは呼ばない支援がどういう風に行けるか、僕や僕の仲間たちで考えています。

安心・安全であるのが家庭でしょ。家庭の中に、居場所を失った子どもたちがどこに居場所を求めるか、学校ですよ。学校の先生たちの協力なくして子どもの貧困対策は進みませんよ。学校に居場所を失った子たちがどこに行くか、昼間のストリートですよ。昼間のストリートでたむろっている子たちに対して、「いいたむろい方してるなー」って僕は声かけますけど、普通は白い目で見るでしょ。その子たちが夜の世界に入っていくんですよ。13、14、15歳で子どもを産むっていうのは、地方都市静岡でも起きている。

居場所は子ども・若者、当事者がつくるべきで、こちらがこういうのがいいといった時点でもうある程度枠付けしている。今、居場所がブームになっている故に、足元から考えないと結局は当事者を優しく傷付ける。だから制度サービスができてラッキーとは僕は思わないですよ。中身を作らなければ、「魂の殺人」をしている、当事者を殺していく。そういうところまで日本の福祉は来ていますよ。昼間の社会保障は崩壊していると思っています。



富士市神戸にある浄土真宗本願寺派常願寺副住職。36才。寺での子ども会を企画運営。富士、富士宮地区でボランティアサポーターとして、境内清掃や雑談、相談を通して若者と交流。地域の課題に取り組む「みんなの寺」を目指す。

「人間は生まれながらにして尊い。これは理念でも理想でもなくて、事実だ」。私の胸に突き刺さっている言葉です。ところが、現実にはそうではない事実がけっこうあるんですね。

生まれながらにして尊いのが事実だと言いながら、虐げられている子どもたちがいる。これっておかしいだろ。そう思って仲間を増やしていく、それが私の僧侶としての生き方かな。

支援者と言われる人が一生懸命手を引っ張ってぐいぐいやって、でもそれってどうなのかな。この場合、結局のところ同じ経験を持った若者たちが友達になって、横にいてくれたり後ろから歩いて来てくれたりして、それでこの若者は助かったんだと思う。

同じ立場の子がそこに座って「私はこんなことがあった」と語り合う。会ってすぐに話にはできませんよ。何日も何回も時間をかけて言葉が出てくる。それらを聴きながら、自分ひとりではないという思いがみんなに生まれてくる。

誰かが向き合っちゃうと、「あんなこともあるよ、こんなこともあるよ。どうやってみな」となり、それができないと「なんでできないの?」になってしまう。これは通用しないと思いました。

隣にいて話を聴いて、抱えているものをだんだん出せるようになる。それでいいんじゃないかな。その都度、作り上げていけばいいし、必要なものがあれば誰かをつなげていけばいいという対応でいいんじゃないか。行政のやり方と僕らのやり方の違ってそういうことなのかと思います。





私は何もできない。
境遇が同じ子どもたちがそこに座っている。
何日も時間をかけながら語り合う。
「私、こんなことがあった」。ぽろりぽろりと言葉が出てくる。
自分ひとりではないという思いがみんなに生まれてくる。
連帯感が生まれて、一緒に行動するようになる。

junshin Akabuchi

目を伏せているわけでも、
逃げているわけでもないと思うんです。

自分のなんとなくわからない
生きづらさに対して
向き合っていないわけでもない。

「向き合わなければだめ」
という強烈な支援論によって
当事者は苦しめられているところが
あるかなと思います。

Takashi Sakama





20代で里親になり、ふじ虹の会を立ち上げる。行政と専門職だけで完結される児童福祉を時代遅れと言い放ち、子育て世代の市民をターゲットにした地域密着型の啓発や協同イベントを仕掛ける。障害者やLGBTなどに関する活動もおこなっている。

福祉施設で働く人たちも経験があると思います。最初就職したときは思いがあって、目の前にいる利用者さんに対して、この人の為にもっとできないか…。この人がもっと幸せになるために、この人がもっと自分らしく生きるために、夢を持って生きられるために、私たちはもっと何かできないか。一生懸命考えて考えて考えた結果、気づいたら立ちはだかってしまっていた。

障害の自己受容や家族の協力を得るために向き合わせようとする。「自分の障害特性をちゃんと理解しましょう」「自分の障害を理解しなければ次に進めませんよ」と。生きにくさを体験してきて、20代、30代で発達障害と診断された人がこう言われるわけです。

また家族に対して、「家族の協力がなければできませんよ」とガンガン言う。だけど、家族って一緒に暮らしている存在であって協力者ということではないですよ。協力する立場なのは支援者のほうです。なのに支援者側が主体になって家族にそういうことを言うてしまう。これがどういったことかと言うと、その人に自分のできないこと、家族が今まで頑張ってやってきたこと、つらい思いをして、涙を流しながらやってきたことを何べんも突きつけ続けているんです。

向き合わないでやっていきましょうって話をすると大体出てくるのが、「寄り添います」。すると福祉の人って「こんにちは。よろしく。私はあなたの味方。私に何でも話してきて」と言って、特に熱心な人がそうなんですけど、最初から距離が近いんですよ。




おとうさんに抱っこされたときのぬくもりが残っている。

おとうさんに背負われたときの気持ちが残っている。

援助交際で男の人にやさしくされると、おとうさんを思い出すんです。

Wataru Tsukayama



石垣島でマンゴー畑をやりながら、非行少年や障害者の支援をしている津嘉山航さん。障害者の施設や相談支援の仕事をしてきた。株式会社ゆにばいしがき代表取締役。

「高校を中退した女の子がちょっと困っているの、助けていただけませんか。とてもジャニーズが好きなんです。ジャニーズに憧れていて「コンサートに行きたいんだ」とすごく一生懸命な子なんです。おしゃれで可愛い子です。

たまたま乗ったタクシーの運転手さんに優しくされ、性行為をしてお金をもらう。それがきっかけで毎日、タクシーの運転手さんを探すんですね。同じタクシーの運転手さんに会えると思って、「お金持ってないんです。でも自分は裸になることができるから」

そんなことが度重なって、地域の保健師さんから私のところに話が来ました。本人に話を聞くとぜんぜん悪気がないんですよ。自分の身体を使うことをね。一番大事なのはコンサートに行きたい、東京で暮らしたい。

幼少期に両親が離婚して、おとうさんの温もりがすごく残っている。おかあさんは深夜まで働いていて、ほとんど家にいない。ひとりぼっちの生活です。

タクシーの運転手さんに優しくされた時に、おとうさんを思い出したんですね。性

衝動が抑えられなくなって、援助交際に発展して、お金もどんどん入るようになっていく。

でもこの子がお金がなぜかどっかから得ている事が、実はお母さんの経済的に助けにもなっていたということで、お母さんが薄々感じ取っていたんだけど止められなかった。というのが分かりました。「でもお母さん、やっぱりこの子の人生を考えたら今これ断ち切らないといけないよね。お母さんも辛いかもしれないけど、ちょっと心配なので1回私に預けてもらえない。」って事でお話をして、生活支援所になっていたんですが、治療とか含めますとね色々応援をしました。その後お母さんが突然いなくなるんですよ。自分が悪かったと思ったことと、元々お父さんと離婚した原因がDVだったって聞いたりとか虐待があったとか聞いたりとかそしてこの子をちゃんと育てるために、日中も夜も働かないといけない、身体はボロボロ精神的にボロボロと言うことで鬱状態だったんですね。沖縄本土の方へ突然いなくなったんですね。なかなか音信不通探せない状態になる時にこの子自身もどう支えていくか切り替えて自立の後押ししかないと考えて、最終的にはこの子はしっかりと自分でお金を貯めて東京に巣立っていきました。目的はコンサートに行くためなんですけどもね。

ここに来るときに新幹線降りてからどうやって来るのかわからなくて、電車でおばあちゃんに聞いた
ら「次だよ～」っておしえてくれたんですよね。

そのうちそのおばあちゃん寝ちゃったんですけど。
優しくあったかくって人に親切で、自分もあたたか
さに気持ちよくなって寝ちゃったりして。

苦労はいっぱいありますけど、子どもたちが幸せ
になるための苦労だったら、みんなで力合わせてし
ていけたら素敵なのかなって。

Satoko Kitagawa





ふじのくにニッポンの縁側フォーラム

(代表 田坂成生)

〒420-0064 静岡市葵区本通1丁目2-4

発行日 2017年3月31日

発行 ふじのくにニッポンの縁側フォーラム

ホームページ

<http://engawaforum.tumblr.com/>

E-mail

engawa.shizuoka@gmail.com

この冊子は、2016年度の福祉医療機構の助成を受けて
実施した「生活困窮の子ども・若者の自立支援」事業として
作成しました。